

研究資料

「教育制度と学校経営」受講生が有する学校像の変容の把握

柳澤彰紀

(同志社大学免許資格課程センター)

Understanding Changes in Students' Image of School in "Education System and School Management"

Akinori Yanagisawa

This study tries to understand changes in students' image of school in an educational subject, "Education System and School Management." Students created image maps with "school" at the center to express that image. After classifying/organizing the words around the central word on maps from the first and fifteenth classes from a common standpoint, and comparing them, it was found that the number of words specifically indicating everyday school life had decreased. Conversely, the number of four words, "teacher," "student," "parent," and "community," as well as essential words forming a perspective on school education quality, e.g., educational system-related words, had increased. Generally, students' school image centered on their experiences had changed to the teachers' perspective. It is confirmed that many students' image of school was reconstructed in this practice, as they must acquire new knowledge and reexamine and reconstruct existing knowledge during teacher training.

Keywords: Image of school, image map, Education System and School Management, teacher training

1. 問題意識

同志社大学の授業科目「教育制度と学校経営」は、教職課程の科目（以下「教職科目」という）のうち、教育職員免許法施行規則の規程における「教育の基礎的理解に関する科目」に該当し、「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域の連携及び学校安全への対応を含む。）」を必要事項として含んでいる。本科目の履修を含め、教職課程修了時は同時に、教職に就くことができる時期と見なされる。「教育制度と学校経営」においても、学校教員としての務めを果たすことができるための基盤を培う視点が重要である。

図1は、厚生労働省子ども家庭局実施の「保育所

等における保育の質の確保・向上に関する検討会（2020）」の資料を援用し、学校教育の質を捉える視座として筆者が作成したものである。中心において児童生徒の発達や学びは、楕円のⅠ～Ⅵによって支えられている。Ⅰ～Ⅵは、人との関わりといったミクロな文脈もあれば、制度や仕組みといった広い文脈もある。それぞれは分ちがたく結びついており、様々な文脈が幾重にも重なり、かつそれらの時間的経過の中で学校教育が展開される。本研究で取り上げる「教育制度と学校経営」は、図1のⅢ及びⅤに係る内容を重点として取り上げ、教職に必要な法規への理解を深め、教育制度、学校組織、学校経営、学級経営、危機管理と法規の関連を考察し、学校が果たす役割や今後の学校教育の在り方について

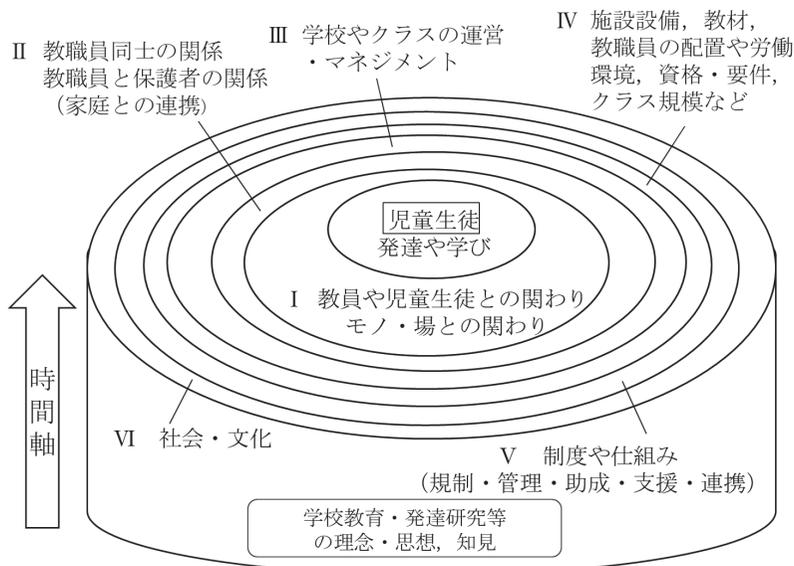


図1 学校教育の質を捉える視座

の考えを深化することを到達目標にしている。本科目において受講生が有する学校像を表出させ、その変容を調査することは、科目の到達目標に照らして学生の学修成果の把握となる。

本論文でいう学校像とは、学校に対しての言語的イメージを指す。三宅（2000）は、「イメージは、体験・経験・感情や既に学習者が持っている知識などを自分なりに体系づけたものであり、知識や概念形成つまりは思考の一部をなすものと考えられている」とし、イメージを可視化するために学習者にイメージマップを作成させている。イメージマップとは、田中（2000）によれば、「核となるキーワードから連想される語をネットワーク形式で書き出させることによって、被験者の言語的イメージを明らかにする」ものである。本研究の目的は、核となるキーワードを「学校」として受講生が作成したイメージマップをもとに、「教育制度と学校経営」の学修成果を把握することにある。なお、「教育」を中心トピックにして、そのイメージを言葉にして放射状に書き出すことで教育観を問い直す方法が庄井（2022）にみられるが、「学校」を中心に据えて、言語的イメージを表出させた研究はこれまで見当たらない。

2. 方法

(1) 調査対象

「教育制度と学校経営」の4月の第1回目の授業

（以下「授業①」という）及び7月の第15回目の授業（以下「授業⑤」という）のいずれにも参加した学生79人（2年生45人、3年生27人、4年生7人）とした。クラスは3つに分かれていたが、主な授業内容は各クラス共通していた。

(2) 調査内容

授業①の冒頭と授業⑤の終了時に、受講生は核となるキーワード（以下「中心語」という）を「学校」としてイメージマップを作成した。受講生は、A4版用紙の中央に書いた「学校」から連想する言葉、さらにはその言葉からの連想語をブランチ（枝）でつなぎ、放射状にウェビングした。調査時間は5分とし、言葉の数や内容による成績評価は行わないことを調査前に伝えた。また、ブランチの書き方に特別な指示はしなかった。

本研究において、「学校」とブランチで結ばれている言葉を「初発語」という。「二次語」は初発語とブランチで結ばれている言葉とする。「周辺語」はそれ以外の言葉とし、ブランチで結ばれていることを条件とする。図2は、初発語、二次語、周辺語、及びブランチのカウントの例示を示している。

(3) 分析内容

2つのイメージマップをもとに、次の分析Aから分析Eを行った。

- ・分析A 総語数（学校像の量的な広がり）

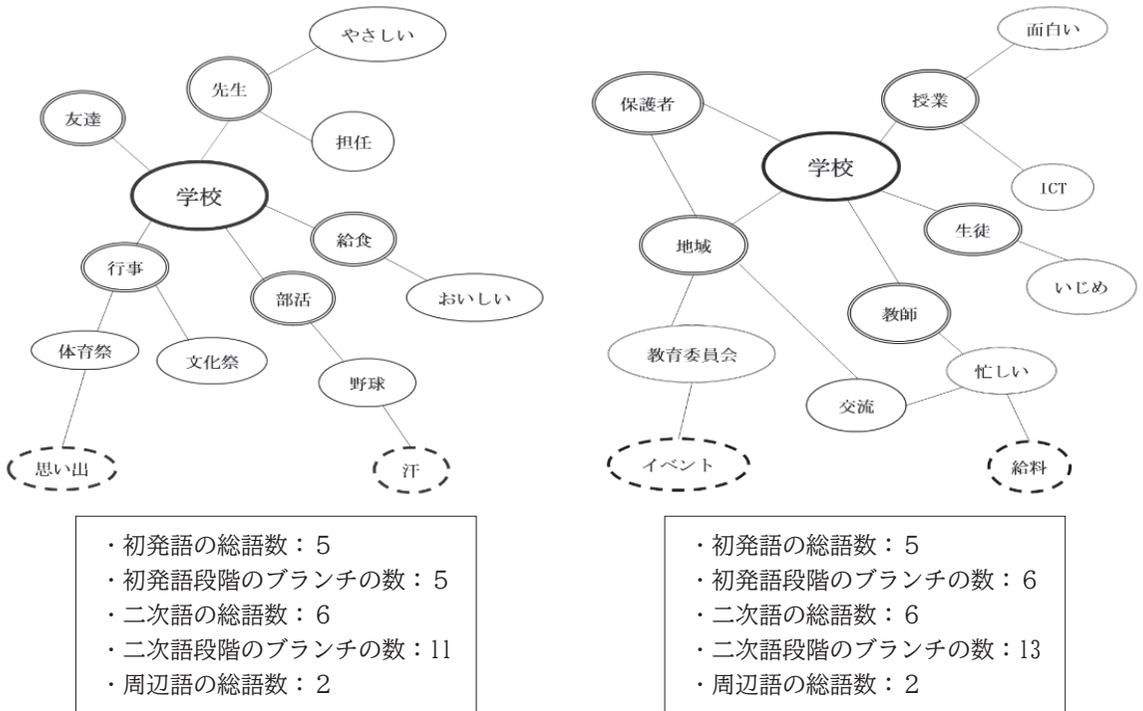


図2 初発語、二次語、周辺語、及びブランチのカウントの例示

- ・分析B 初発語（学校像の質的な変化）
総語数が多いため、カウント数が3以上の初発語にしぼって整理（同類の言葉は一括りにしてカウント（例、「部活」は「部活動」に、「朝早い」は「早起き」にカウント））
- ・分析C 初見の言葉（学校像の質的な変化）
授業①にはなかったが授業⑮ではみられた言葉のうち、初発語、二次語、及び周辺語の合計数が10以上であったものを抽出（同類の言葉は一括りにしてカウント（例、「初任者研修」は「研修」としてカウント））
- ・分析D 初発語と二次語の関係性（言葉のつながりの構造的性）
同じ二次語または同類の言葉として分類した二次語について、増減の幅が10以上のもの

- を抽出し、初発語との関係性を整理
- ・分析E ブランチ数（言葉のつながりの構造的性）
総語数の増加と比べたときのブランチ数の増加

3. 結果

（1）総語数（学校像の量的な広がり）

分析Aの結果を表1に示す。表1は、調査対象9人全員の総語数を上段に、一人当たりの平均語数を下段に表している。初発語、二次語、及び周辺語のいずれにおいても、授業①から授業⑮にかけて総語数は増加した。一人当たりの平均としては、初発語で0.9語、二次語で2.6語、周辺語で2.7語の増加であり、合計6.2語の増加であった。

表1 イメージマップ中の言葉の数（上段：総語数、下段：平均）

授業	初発語	二次語	小計	周辺語	合計
授業①	457 (5.8)	764 (9.7)	1221 (15.5)	394 (5.0)	1615 (20.4)
授業⑮	527 (6.7)	969 (12.3)	1496 (18.9)	607 (7.7)	2103 (26.6)

(2) 初発語（学校像の質的な変化）

分析Bの結果を次に示す。

【授業①での初発語（カウント数3以上）】

部活動52, 授業34, 勉強29, 先生28, 友達／友人27, 行事21, 給食17, 生徒12, クラス／学級11, 教室9, テスト／試験9, 小学校7, 文化祭7, ルール／校則7, 高校6, 中学校6, 放課後6, 委員会5, 教師5, 修学旅行5, 制服5, 休み時間5, 早起き4, イベント4, 運動会／体育祭4, 課外学習4, 教員4, 小中高4, 受験4, いじめ3, 校庭3, 宿題3, 青春3, 掃除3, 大学3, 通学3, 人間関係3

【授業⑤での初発語（カウント数3以上）】

生徒46, 部活動38, 行事36, 地域34, 授業25, 教員24, 教師24, 勉強20, 保護者16, 先生14, 友達／友人13, 教育委員会13, 給食10, いじめ9, 地域との関わり7, 教室6, 親5, 進路5, 施設／設備4, 生徒指導4, PTA4, 文化祭4, ICT3, 義務教育3, 教育3, 教育基本法3, 国／政府3, クラス／学級3, 地域の人3, 特別活動3, 人間関係3, 放課後3, 問題3, ルール／校則3

授業①及び授業⑤ともにカウント数が20以上であったものは、「部活動」, 「授業」, 「勉強」, 「行事」であった。人を表す言葉のうち, 授業①から授業⑤にかけて, 「先生」が28から14に, 「友達／友人」が27から13に減った。一方で, 「生徒」が12から46に, 「教員」が4から24に, 「教師」が5から24に, 「保護者」が

0から16に増えた。また, 授業①では2であった「地域」は, 授業⑤では34みられた。関連事項として, 授業①にはなかった「地域との関わり」と「地域の人」が, 授業⑤では合わせて10みられた。授業①にみられた「給食」, 「放課後」, 「休み時間」, 「早起き」, 「掃除」, 「通学」は, 日常の学校生活を示す言葉である。その合計数は38であったが, 授業⑤ではカウント数2以下のものを加えて16に減少した。

(3) 初見の言葉（学校像の質的な変化）

分析Cの結果を表2に示す。「不登校」, 「研修」, 「学習指導要領」, 「進路指導」のほか, 危機管理関係や特別支援教育関係, カウンセリング関係の言葉の7つが該当したが, いずれもが初発語のカウント数は2以下であった。

(4) 初発語と二次語の関係性（言葉のつながりの構造的性）

分析Dの結果のうち, 授業①と授業⑤を比較したときの二次語の減少幅が10以上であったものを表3に, 二次語の増加幅が10以上であったものを表4に示す。表3からは, 初発語の「部活動」からの連想として, 二次語で特定の部活動名が書かれたものが23から2に減ったことがわかる。初発語の「授業」と「勉強」からの連想では, 教科・科目を示す言葉が35から16に減った。また, 「むずかしい」や「眠い」など, 授業や勉強の受け止め方を示す言葉も減った。初発語の「先生」・「教師」・「教員」からの連想では, 「やさしい」, 「きびしい」などの感情的な言葉が24から2に減った一方で, 表4からは, 同じ初発語から連想された二次語として, 教員の労働環境や労働条件を示す言葉が7から17に増えたことがわかる。また, 管理職を指し示す言葉が2から14に, 進路指

表2 授業①にはみられなかったが授業⑤では10以上みられた言葉とその数

授業⑤でみられた言葉	初発語	二次語	周辺語	合計
「不登校」	2	9	9	20
「研修」	0	13	7	20
「学習指導要領」	2	6	5	13
「進路指導」	1	10	0	11
危機管理関係	0	14	11	25
特別支援教育関係	1	8	9	18
カウンセリング関係	0	8	10	18

注) 二重線より上段は, その用語を含む別の言葉も一括りのものとして分類したもの。
下段は, 特定の用語を含まないが, 同類として分類できたもの。

表3 初発語から連想された二次語で10以上の減少がみられたもの

初発語	左記からの二次語	授業①	授業⑫
「部活動」	特定の部を示す言葉 (「サッカー」, 「吹奏楽」など)	総語数: 23 人数: 13	総語数: 2 人数: 2
「授業」「勉強」	教科・科目を示す言葉 (「国語」, 「体育」など)	総語数: 35 人数: 18	総語数: 16 人数: 10
	授業の受け止め方を示す言葉 (「むずかしい」, 「眠い」など)	総語数: 12 人数: 9	総語数: 2 人数: 2
「先生」「教師」「教員」	情感的な言葉 (「やさしい」, 「きびしい」など)	総語数: 24 人数: 13	総語数: 2 人数: 2

表4 初発語から連想された二次語で10以上の増加がみられたもの

初発語	左記からの二次語	授業①	授業⑫
「先生」「教師」「教員」	労働環境や労働条件を示す言葉 (「忙しい」, 「働き方改革」など)	総語数: 7 人数: 5	総語数: 17 人数: 17
	管理職を表す言葉 (「校長先生」, 「教頭」など)	総語数: 2 人数: 2	総語数: 14 人数: 10
	進路指導関係の言葉 (「進路指導」, 「進路相談」など)	総語数: 0 人数: 0	総語数: 13 人数: 13
「生徒」「友達/友人」 「人間関係」	「いじめ」	総語数: 2 人数: 2	総語数: 14 人数: 14

導関係の言葉が0から13に増えた。初発語の「生徒」・「友達/友人」・「人間関係」から連想された二次語の「いじめ」が2から14に増えた。

(5) ブランチ数(言葉のつながりの構造的)

分析Eの結果を表5に示す。初発語の段階及び二次語までの段階のいずれにおいても、ブランチ数の増加は総語数の増加を上回った。

4. 考察

(1) 学校像の量的な広がり

表1から、学校像の量的な広がりが確認できた。ただし、初発語段階では平均して0.9語の増加であり、

二次語などに比べて増加数は多くない。

(2) 学校像の質的な変化

p.14で示した初発語や表2から、学校像の質的な変化が確認できた。初発語として、授業⑫では、「給食」や「放課後」など、日常的な学校生活を示す言葉が減った。「先生」が半減したが、「先生」は、具体的な個人を指したり、「やさしい」などの情感を込めたりする際に用いられやすい。約5割減少した「友達/友人」は、身近にいるクラスメイトや仲間をイメージしたときに連想されやすい。授業⑫では、「教員」と「教師」が増えたが、「教師」は、高橋(2021)によれば、意図的に教える仕事を行う者のイメージがあるとされる。「教員」は法律用語であり、授業

表5 ブランチ数と総語数の比較

	初発語の段階		二次語までの段階	
	ブランチ数	総語数	ブランチ数	総語数
授業①	469	457	1257	1221
授業⑫	613	527	1653	1496
増加数	144	70	396	275

では、教育制度や法規と関連付けながら、教員の身分や待遇、職務上及び身分上の義務、教員の養成と育成の課題などを取り上げた。また、約4倍に増えた「生徒」は、学校で教える受ける者を「教員」や「教師」の視線から捉えたものであり、授業では、教育法規にみる懲戒と体罰の違い、出席停止の取扱い、いじめや不登校、児童虐待への向き合い方などを取り上げた。授業⑮では「地域」と「保護者」も増えた。これらについては、コミュニティ・スクールと地域学校協働本部の一体的な増加の中で、学校とそれらとの連携・協働の重要性を考察した。

表2にある授業⑮での初見の言葉「不登校」、「研修」、「学習指導要領」、危機管理関係については、判例や裁判例から何が学べるか、教員としてのこれらの課題への向き合い方を考えさせたが、主として「教員」や「生徒」をテーマとする授業で取り上げたため、初発語ではなく、二次語や周辺語での初見となったものとする。進路指導や特別支援教育、カウンセリングに関する言葉が初見であることは、他の教職科目の学修成果であるといえよう。

(3) 言葉のつながりの構造的性

表3から、授業①では、初発語の「部活動」や「授業」からの連想が同類の羅列的な言葉や自己の体験に基づく二次語と結びつく傾向がみられた。初発語の「先生」・「教師」・「教員」からは、授業①では情動的な言葉に、表4から授業⑮では、労働環境や労働条件、管理職に関連する言葉につながる傾向がみられた。表4からは、初発語の「生徒」などから「いじめ」を連想する受講生が増えたこともわかる。授業では、生徒指導をめぐる、いじめ問題への対応が学校経営上きわめて重要な課題となっていることについて考察した。

表5から、授業①と比べて授業⑮では、総語数の増加よりもブランチ数の増加が大きく、ブランチが密になった。一つの言葉を多面的にとらえられるようになったことが背景にあると考えるが、あくまで想定であり、今後の研究の課題としたい。

5. おわりに

「学校教育の質を捉える視座」(図1)との関係をみてみると、分析の結果、授業①で学生は自分が通った学校での経験や思い出から学校像を表出していたことから、図1における中心部分の「児童生徒」の発達や学びには受講生自身の体験が投影され、主として図1のIに位置する身近な先生や友達との相互作用の視点から学校像を表出していたと考える。授業⑮では、図1のVの教育制度やIIIの学校経営の文脈はもちろんこと、IIの教職員と保護者の関係、IVの教員の労働環境といった幅広い文脈で学校像が表出された。Iに位置する教員に自らを投影させ、図の中央に位置する「児童生徒」に教員としていかに関わるかを考えられるようになったとも言えよう。「生徒」、「教員」、「保護者」、「地域」といった言葉や教育制度に関連する言葉が増え、学校像は質的に転換した。学校教育の質を捉える視座を形成する基本的用語が増えたとも言える。イメージマップによる学修成果の可視化は、既存の知識の問い直しのもと、学校教育の質を捉えるための視座を再構築しているプロセス途上にある学生を教育的な機能として支援していくための手法にもなり得ると考える。

参考文献

- 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会総論的事項研究チーム(2020). 保育所等における保育の質に関する基本的な考え方等(総論的事項)に関する研究会【報告書概要】
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000631928.pdf> (最終閲覧日: 2023.12.14)
- 三宅 正太郎(2000). 教育評価道具としてのイメージマッピングテスト(IMT)について 日本科学教育学会研究会研究報告, 15(3), 39-44.
 DOI:ISSN-L:1882-4684
- 庄井 良信(2022). よい教育ってどんな教育 勝野 正章・庄井 良信(著) 問いからはじめる教育学【改訂版】(pp.2-15) 有斐閣
- 高橋 陽一(2021). チーム学校の教師論 武蔵野美術大学出版局
- 田中 博之(2000). イメージ研究 日本教育工学会(編) 教育工学事典 (pp.33-34) 実教出版

要約

本論文では、教職科目「教育制度と学校経営」受講生が有する学校像の変容を把握した。学校像の表出として、学生は「学校」を中心語とするイメージマップを作成した。第1回目と第15回目の授業で実施したイメージマップの中心語周辺の言葉を共通の観点で分類・整理し、比較したところ、日常的な学校生活を具体的に示す言葉が減った。一方で、「教員」、「生徒」、「保護者」、「地域」の4つや教育制度に関連する言葉など、学校教育の質を捉える視座を形成する上での基本的な言葉が増えた。概して学生は、自己の経験を中心とした学校像が、教員の視線からのものに変容した。教員養成段階において、学生には新たな知識の獲得のみならず、既存の知識の問い直しと再構築が求められているが、本実践では学校像が再構築された学生が多いことが確認できた。

キーワード：学校像，イメージマップ，教育制度と学校経営，教員養成